

工學部の大講堂で、主に理學部と工學部の關係者約200名が集まつた。題は“Two elementary problems in dynamics”といふのであつて、天文學的には Periodic orbit の或る特殊例を見るべき興味深いものであつた。講演後暫く休憩して、教授は總長主催の晩饗會場(樂友會館)に行かれた。——此の間に、自分は英子をつれてホテルへ Birkhoff 夫人を迎へに行き、6時には亦晩餐會場に案内した。晩餐會は Birkhoff 氏夫妻を主賓として、數學物理學天文學地球學關係の諸教授で、總計約三十名、うち解けた會であつた。24日、朝8時50分、Birkhoff 教授夫妻退京、神戸へ向はれ、西内松本兩教授と共に自分等は之れを見送つた。Birkhoff 氏は今春ドイツ國ベルリン大學に招かれて數學の講演に行かれる途上である。

Birkhoff 教授を送つた翌日、自分は室の一隅に同教授の著書 The Origin, Nature and Influence of Relativity を發見した。

コムストク教授の來朝

山本一清

去る二月の初め、或る日の夕刊新聞に、President Jackson といふ船で米國から Comstock 博士夫妻が横濱へ來着したこのニュースが載つてゐたので京都へも必ず來遊されることと思ひ、新城教授は東京邊の天文關係へ、自分は東京京都のホテルあたりへ聞き合せて見たけれど、一寸、京都着の日取りがわかりかねた。しかるに10日の夕刻、京都のミヤコ・ホテルにより同教授夫妻が前日に來着されたこの通知を受けた。

* * * * *

G. D. Comstock 博士は1887年から1921年まで前後35年間、米國 Wisconsin 州立大學 (Madison 市) 天文學教授と天文臺長の職にあつた人であつて先年、其の職を Joel Stebbins 博士に譲つて退隱したが、學界に於いては今尚ほ重きをなし、現に米國天文學會 (American Astronomical Society) の會長 (President) である。Madison の天文臺は自分が滯米中1923年五月に親しく訪問したところあり(「天界」第35號第366頁參照)、其の節 Stebbins 博士

の歡待を受けて、臺長宅に一泊したこゝもあるが、當時 Comstock 老博士は歐洲旅行中で自分は會はなかつた。しかし1924年八月には米國東部の Dartmouth College で開かれた米國天文學會總會に出席して、自分は Comstock 氏に會つたこゝがある。

Comstock 氏は若い頃カリフォルニア州 Lick 天文臺の創立後間もない頃に居て、始めて Lick の子午環を使用し、緯度の觀測なごした人であるが、



コムストック教授 荒木助教授 山本
山本夫人 コムストック夫人

Madison に移つてからは熱心に大氣屈折の觀測や理論研究をし、又、部下の Flint 教授と共に恒星視差の子午線觀測なごやつた。近年は二重星や微光星の固有運動なごで名を内外に馳せてゐた人である。かつて Textbook of Field Astronomy といふ良い書物を書いた人であつて、自分も學生時代から此の著書によつて其の名を知つてゐた、

* * * * *

二月十日の夕、自分と新城教授とはホテルへ行つて、Comstock 氏夫妻に會ひ、歡迎の意を表はし、明日大學天文臺に迎へる事なご約束した。

翌11日は紀元節であつたが、自分は英子と共に大學の自動車を以つて、同志社の Miss Denton 方へ午饗に招かれてゐた Comstock 氏夫妻を迎へに行き、大學では先づ新城教授と同道して、一同、總長室に案内し、總長の挨拶があつた後、自分は夫妻を天文臺に案内した。(新城教授は此の日非常に多忙で、此の後、他行せられた。)

天文臺では休日に拘らず荒木助教授も出て來られたので、休憩室で暫く談笑したが、其れから自分は30センチ赤道儀、33センチ反射機、18センチ赤道儀、46センチ反射機、分光太陽寫真機等を見せた。此の序でに、自分は30センチに附屬してゐる micrometer が特殊な型なので、其の有効な使用法を『御存じありませんか?』と聞いて見たが、教授は可なり考へられた末、『わかりません』と言はれた。——此の日は夕暮に夫妻をホテルに送り届けた。

翌12日は日曜であつたが、朝九時過ぎ、新城教授と自分とはホテルに Comstock 夫妻を訪ひ、附近の智恩院、圓山公園、八坂神社あたりを散歩。雪解けで道路は可なりひびきかつたが、歩きながら主客は學問上の色々の話しをした。——新城教授は此の夜上京。

次の13日には午前中、英子が Comstock 氏夫妻を市中に案内して、買ひ物なごの世話をした。夫妻は此の日午後4時發の列車で神戸へ向はれたので自分は英子と共に之れを停車場に見送つた。

教授夫妻は之れから支那や印度を経て、五月頃歐洲イタリア上陸し、七月にはオランダ國ライデンの天文同盟總會に列席される筈。

650センチ大反射鏡の製作中止

米國 Wilson 山の天文臺の「100吋」や「60吋」反射鏡を作つた G. W. Ritchy 氏が1923年から佛國 Paris 天文臺に招かれて、Dina 氏の寄附による650センチ(250吋)大反射鏡を製作中であつたことは既に「天界」第58號第439頁に記されてあるが、近着報によれば此の大計畫は今般寄附者 Dina 氏によつて放棄されたといふ。従つて世界第一の大反射鏡は依然として Wilson 山の「100吋」であるわけである。